見立ての詩学――擬えと転用の弁証法

大石昌史（慶應義塾大学）

本発表は、日本文化を特徴づける芸術表現（技法）の一つである「見立て」（或るものを他のものとして見ること）を、「イメージ（像）」と「観念（意味）」との交差･反転的な関係づけとして、心理学的･認識論的に規定される内的な意識作用と文化的･歴史的に規定される外的な言語行為の二つの観点から総合的に考察するものである。

第 1 節〈見立ての構造〉では、見立てが、イメージの類比に基づく直観的な意識の働きである「擬え comparison」（比較）と観念の類比に基づく論理的な言語使用である「転用 transfer」（命名）という二つの作用によって重層的に構成されることを指摘し、これら二つの作用について、それぞれ心理作用あるいは言語行為としての一般的な解明を試みる。イメージと観念それぞれの類比に基づく見立ては、イメージ相互の関係づけである「擬え」が、観念を表示する言語（記号）の修辞的な「転用」すなわち広義の「隠喩 metaphor」を通じて、通常の意味作用を逸脱した転移的な表現として現実化される。

第 2 節〈イメージの擬え〉では、或るものを他のものに喩える芸術表現としての「擬え」の一般的なあり方を検討した上で、その個別的な事例であると同時に特定の文化的コードへの依存度の高まりを示す日本における「見立て」について、和歌における「見立て」、浮世絵における「見立絵」、茶道具の「銘」（命名）、等を中心に考察する。「見－立て」は、敢えて意識的に見ることを意味するが、このような日本的な見立てには、単なる類比関係に基づく擬えにとどまらず、似ても似つかぬものを敢えてそれとして見るという遊戯的･創作的な表現行為が含まれている。

第 3 節〈修辞的転用〉では、擬えを表現として現実化する言語の「転用」について、それを可能にする語もしくは観念の間の類比関係を、意識の連想作用と具体的な修辞法の両面から考察する。意識の内的な表象作用に基づく擬えは、イメージを喚起する言語の隠喩的使用、持物 attribute によるイメージの記号化（意味づけ）、あるいは表題 title によるイメージの転義的命名、等の言語の転用（転義的使用＝隠喩的表現）によって目に見える行為として外的に定着する。しかし、イメージの擬えと観念の転用とは、意識が前景として捉えるものを異にしている。擬えが目前の対象（イメージ）を前景として擬えられた対象を後景とするのに対して、転用は転用された観念（隠喩）を前景としてそれによって隠喩的に表示された観念を後景とする。

以上の考察を通じて、「見ること」による関係性の発見（擬え）と「名づけること」による関係性の表現（転用）とによって構成される「見立て」は、内的な表象作用と外的な言語使用のそれぞれが前景化するイメージと観念とが弁証法的（交差･反転的）に関係づけられることによって成立するところの心理的であると同時に文化的な表現行為であると結論づけられる。